

Title	ケーザイの著作『ゲスタ』におけるナティオ : スューチ説の批判的検討(1)
Author(s)	鈴木, 広和
Citation	ハンガリー研究. 1 p.107-p.130
Issue Date	2021-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/81532">https://doi.org/10.18910/81532</a>
rights	
Note	ISSN: 2436-1364 (print), 2436-4932 (online)

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ケーザイの著作『ゲスタ』におけるナティオ\*

## —スューチ説の批判的検討(1)—

鈴木広和

### 1. はじめに

カトリック世界の歴史記述では、11世紀までキリスト教的な救済史観が支配的であった。それは天上の国に最終的な価値を置き、現世に価値を見いださない世界観、歴史観であった。しかし12～13世紀の間に、それとは異なる歴史が書かれ始める。都市や修道院、王国を初めとする、現世のさまざまな集団や組織に価値を見だし、その歴史を描こうとする動きが始まった。こうした歴史を記述する者は、当該の都市、修道院、王国などに帰属意識を抱きつつ、いわば「われわれの歴史」を書いた。帰属意識にもとづく共同体意識は、歴史叙述のなかで、当該集団の出自神話と結びつけられることがあり、またしばしば、政治意識とも結びついた。こうした傾向を、歴史記述の「世俗化」という言葉で表すこともできよう<sup>1</sup>。このような傾向と同時に、カトリック改宗以前の異教時代を積極的に歴史記述に取り入れる傾向もみられ始めた<sup>2</sup>。

ハンガリー王国においても、このような歴史記述の変化が12世紀末から13世紀に見られた。代表的なものとして、いわゆる逸名作者による『ハンガリー人の事績』*Gesta Hungarorum* (通称『アノニムスの年代記』)や<sup>3</sup>、国王ラースロー4世(位1272–90)の宮廷司祭ケーザイ・シモンが書いた『ハンガリー人の事績』*Gesta Hungarorum* (以下『ゲスタ』)がある。どちらの著作も一般には年代記と呼ばれているが、本来のカテゴリーとしては年代記ではなく歴史書である<sup>4</sup>。『ゲスタ』が書かれたのは1280年代前半である(Veszprémy 1999: 157.)。ケーザイはおそらくパドヴァ大学で法学を学び(Szücs 1999: 49.)、その影響が『ゲスタ』にも見られる(Horváth 1954: 374; Gerics 1957: 111–112.)

本稿は『ゲスタ』が13世紀カトリック世界における新しい歴史叙述の

なかに位置づけられるという見解をとりつつも、その位置づけをより詳しく見ていこうという目的から、『ゲスタ』で使用される言葉について検討する研究の一端である。

## 2. ケーザイ年代記の内容の概要

『ゲスタ』は、ハンガリー人とフン人を同一だと見なし、その歴史を描いた作品である。4部構成になっている。第1書はフン人の歴史、第2書はハンガリー人の歴史、第1付録は外来の貴族家系、第2付録は異民族出身の隷属民について記述している<sup>5</sup>。第1書で序文に続き、聖書の記述と関連づけつつ、ハンガリー人すなわちフン人の起源を説きおこす。フノルとマゴルの兄弟二人が新しい住处であるスキティアの地を発見して住み着き、二人の子孫がフン人すなわちハンガリー人となり、そのうちの一部が原郷の地スキティアから移動してパンノニアを占領し、アッティラに率いられてパンノニアに大勢力を築いた後、アッティラ死後に、その王国が崩壊するまでを描く。第2書は、フン人=ハンガリー人がパンノニアを再び征服した過程と、カトリックを受け入れ王国が成立したことを説明した後、代々の国王の治世を簡略に叙述し、最後は著者ケーザイが仕えたラースロー4世の活躍を詳しく述べ、同王を讃えて終わる。第1付録はハンガリー王国内にいる外来の貴族家系の出自について、第2付録はおもに戦争捕虜から生じた隷属民について説明する。このうち、第1書および第2付録は、ほぼケーザイ独自の記述である (Veszprémy 1999: 159–160; Kristó 2002: 75.)。第2書は、ケーザイの同時代史であるラースロー4世治世を除くと、既存の史書などの記述を簡略化したものである (Horváth 1963: 450)。第1付録も既存の史書を利用したと考えられるが、ケーザイ独自の見解も書き加えられている (Veszprémy 1999: 159–160.)。第1書、第2書がハンガリー人=フン人全体の歴史であるのに対し、二つの付録は、なぜハンガリー王国に外来の貴族および隷属民がいるのかを説明しており、対照的である。なお、ハンガリー人の中にも隷属身分となった人々がいること、およびその原因を第7章で述べているが (*Gesta*: 28, 30; *SRH*: 147–148.)、ハンガリー人

隷属民ないし非貴族の現状については詳述していない。

なお、『ゲスタ』の著者がケーザイであり、フン人の歴史を描いた第1書の主要部分などの記述が、ケーザイのオリジナルであることが定説となったのは、そう古いことではない。著者を確定する上で特に重要だったのが、ホルヴァートの研究であった (Horváth 1954; Horváth 1963)。フン人とハンガリー人を同一の集団と見なすケーザイの見解は、後々数世紀にわたりハンガリー人、特に貴族の自己意識に大きな影響を及ぼしたのであるが (ニーデルハウゼン 2013: 252)、ハンガリー人とフン人を同族とするような見方は、もともとは西欧で書かれていたことである。ケーザイはそうした記述を含め、国内外の史書、聖書の記述などをとりいれつつ、ハンガリー人のカトリック改宗以前の歴史として、フン人の歴史を創作した。詳しいフン人の歴史を書いたのは、ケーザイが最初であるがそれは彼の手になるフィクションであった (Szűcs 1984: 472)。なお、ケーザイは、フン人がハンガリー人の祖先というのではなく、フン人とハンガリー人とは同一であり、同一集団の別の名称として書き進めている。

『ゲスタ』の原本は現存していない。中世、おそらく13世紀末に作成された写しを元にして、18世紀にいくつかの写しが作成されたり、刊本が出版されたりしたが、その後18世紀末に中世写本の行方はわからなくなった。18世紀の写しの中で最も信頼性が高いとされているのが、K写本である。そのほかにH写本、P写本などがあり、1782年にH写本をもとにウィーンで出版された刊本もある (Veszprémy 1999: 155–157.)。アールパード期 (11～13世紀) に作成された年代記、聖人伝などを多数収めた刊本 *Scriptores Rerum Hungaricarum* (SRH) は、信頼性が高いという評価を得ており、『ゲスタ』についても、一般にこれが出典として利用されているが、おもにK写本が使われている。このSRHに依拠しつつ、より整合性のある編集をし、英語の対訳をつけたのが、Simonis De Kéza, *Gesta Hungarorum* (Gesta) である。本稿では、この二つの刊行史料を利用し、『ゲスタ』の章番号も、これらに従う。

### 3. 研究史と論点

『ゲスタ』研究の一つの到達点と見なされているのがスューチ・イエヌーの研究である (Szűcs 1984; Szűcs 1999) <sup>6</sup>。スューチの議論は多岐にわたるが、最も重要な論点の一つがナティオ *natio* である。スューチは、13 世紀にカトリック世界の歴史叙述において、ナティオという語の意味や用法が変化したことに注目した。スューチによれば、それまでナティオという語の基本的に意味は、出自を同じくする比較的小さな集団、自然発生的な集団を指した。また、蛮族や異教徒などを指すのにも用いられ、否定的なニュアンスを持つ語であり、そのため自分が帰属する集団にはあまり用いられなかった。しかし 13 世紀後半になると、カトリック世界各地で使用法や意味が変化した。共通の起源を有すると見なされた、比較的大きな集団を表したり、また自然発生的な存在ではなく、何らかの人為的なまとまりのある集団を意味するようになり、しかも否定的なニュアンスが消えて、自分が帰属する集団に対しても使われるようになった (Szűcs 1984: 486)。このような意味、用法の変化をハンガリーでいち早く取り入れたのが、ケーザイだとスューチは言う (Szűcs 1984: 464–470; Szűcs 1999: 65–66.)。

スューチはさらに、13 世紀のハンガリー王国において、初期身分制的な国制の萌芽が現われたという政治的变化も考慮に入れつつ、『ゲスタ』においては「ハンガリー人のナティオ」*natio Hungarorum* が、歴史の主体として扱われているとみなし、そこにケーザイの政治意識ないし政治思想を見ようとする (Szűcs 1984: 468, 455–498.)。『ゲスタ』をナショナルな歴史作品と見なし、中世のナショナリズムを見てとるスューチの主張は、広く受け入れられているといっていよい<sup>7</sup>。ケーザイによるナティオという語の使用に関するスューチの論点のうち、本稿では以下の 4 点について検討する。

I. 自民族であるハンガリー人を示すのにナティオ *natio* を用いた (Szűcs 1984: 483–484; Szűcs 1999: 659.)。

II. 出自・起源を同じくすると見なされたハンガリー人全体をナティ

オという語で示す一方、フン王国あるいはハンガリー王国内の非ハンガリー人をエクステラ・ナティオ *extera natio* 「外のナティオ」と呼んで、区別した<sup>8</sup>。

III. これと並行して、それまでハンガリー王国内に居住するハンガリー人、非ハンガリー人全てを指すのに使用されたゲンス *gens* という語を、ケーザイは別の新しい意味で使用した。

IV. ナティオという語に積極的な意味をもたせ、ハンガリー人のナティオ *natio Hungarorum*<sup>9</sup> を、歴史の主体として『ゲスタ』という歴史書を書いた。また古代自由民共同体の自由を保持していた中世の貴族が、ハンガリー人のナティオの中心である (Szűcs 1984: 470, 476–478, 506–511; Szűcs 1999: 61–64.)。

以下、『ゲスタ』でのナティオ使用を具体的にとりあげて、この4つの論点について検討していくこととする。

#### 4. ナティオの用例と5つの論点の検討

それでは『ゲスタ』において、ナティオという語がどのように使われているのかを具体的に見ていこう

ケーザイは、合計20回ナティオという単語を使用している。このうち第44章に見られるものは聖書からの引用で例外的であるため (Szűcs 1984: 486; *Gesta*: 102; *SRH*: 172.)、ここでの考察から除外し、その他の19例を二つの範疇に分けて検討を加える。一方の範疇はハンガリー人を指し示すと考えられるものだが、3例しかない。他方の範疇はハンガリー人以外に用いられている16例である。

##### 4.-I. ハンガリー人を指し示すナティオの用例

ハンガリー人を指す最初の例は、序文にあたる第2章の中にある。

ハンガリー人が為した事蹟をお知りになりたいと貴方 [ラースロー4世のこと—筆者] が切に願っていて、それが私の知るところとなったので、・・・このナティオの歴史を一つの巻にまとめるよう努めた<sup>10</sup>。

「このナティオ」がハンガリー人を指していることは間違いない。同じ第2章では続けて、「前述のナティオの起源、どこに住んだのか、どれほど多くの国を占領したのか、住む場所をどれほど変えたのかも記す」とある<sup>11</sup>。これも最初の例と同じくハンガリー人のことである。ケーザイは確かにここで「ハンガリー人のナティオ」の歴史を書こうと意思表示し、具体的にどのような点に注目して書くのかを説明している部分である。そしてこのあと、ハンガリー人の起源伝承が続くのであり、この第2章が、ケーザイのハンガリー人意識に導かれて書かれていることは明らかである。なお、起源や居住地の問題を扱うと言っているのであるから、このナティオには、貴族だけではなく全てのハンガリー人が含まれると考えてよいであろう<sup>12</sup>。

なお、第20章にも、第1の範疇、つまりハンガリー人を指すのにナティオを使っている箇所がある。アッティラの息子の一人チャバが、クリムヒルドの戦いで、ドイツ諸侯と異民族の軍勢に支えられた兄弟アラダールに敗れたあと、スキティアの地に逃げていったときのことを次のように記述している。

しかしながらチャバは逃れ、スキティアの地へ、父のナティオと血縁の人々のところへ (*rediens in Scitiam ad patris nationem ac cognatos*) 帰り、チャバはスキティアに入るとすぐに、パンノニアに戻りドイツ人に復讐するよう説得を始めた<sup>13</sup>。

確かにここでもナティオの語はハンガリー人を指し示している。しかしこれは、ハンガリー人全体を集団として捉えて用いられている例 (Szűcs 1984: 480; Szűcs 1999: 67–68.) だとは見なしがたい。また下線部のように、ナティオ *natio* と血縁の人々 *cognatus* が並列されており、しかも「父の」という修飾語がついていることから、このナティオは、むしろ *cognatus* に近い意味、同じ血統の比較的小さな集団という意味で使われていると解釈される<sup>14</sup>。したがってハンガリー人を指すとはいえ、こ

のナティオは、古い意味での用例と見なすべきである。ハンガリー人全体を指すわけではなく、ましてや歴史の主体としてのハンガリー人を意味するのでもない。

第2章の最初の2例が、ハンガリー人全体を指す例であることはまちがいなく、そしてケーザイは確かにここで、ハンガリー人のナティオの歴史を書くと意思表示してはいるものの、実際には、第3章以降では、ハンガリー人全体を指すのに、ナティオの語を使用していない。

#### 4.-II. エクステラ・ナティオ *extera natio*

エクステラ・ナティオについて検討する前に、まず、ハンガリー人以外を指し示すナティオ全体について見ておこう。全部で16例ある<sup>15</sup>。

自民族以外の集団を指すという点では、ナティオの古い用法と同じである。それでも、いやそれゆえ、スューチは、ケーザイが第2の範疇のナティオも、新しい意味の言葉として用いていることを強調しようとしている。

スューチは、『ゲスタ』と、14世紀に編纂された年代記の記述とを詳細に比較し、14世紀年代記編纂者が、『ゲスタ』の文章を引用するときに、ナティオの語を省いたり、別の語に置き換えたりしている箇所を指摘するとともに、省略や置き換えの理由を、14世紀の年代記編纂者が、ケーザイによるナティオの用法が新しすぎるがゆえに理解できなかったためだと説明する (Szűcs 1984: 486–489; Szűcs 1999: 65–68.)<sup>16</sup>。ケーザイの先進性を示そうとし、ケーザイの執筆時のみならず、14世紀の年代記編纂者も理解できないほど新しかったことを論証しようとするスューチの説明は、必ずしも合理的、説得的ではない。

スューチによれば、14世紀年代記編纂者がナティオの語を省いたりせずに、そのまま使っている箇所もいくつかあるが、それらはナティオという語がもつ、血統などといった元々の古い意味でも解釈できそうな部分、言い換えればケーザイの意図を誤解しても意味が通るような部分だけであるという (Szűcs 1984: 486)<sup>17</sup>。

しかしこの説明は、ケーザイのナティオの用例が、あまりに新しすぎ



たために、14 世紀の年代記編纂者でさえ理解できたはずがない、ということ、自明の前提として、初めて成り立つ議論である。

その前提に立って、14 世紀年代記にナティオの語がそのまま残されている箇所は、ナティオが古い意味でも解釈できるような場合であり、ナティオの語が省かれたり別の語に置き換えられたりした箇所は、14 世紀編纂者が、ケーザイの新奇の用法を理解できなかった場合であると説明している。これは一種の循環論法である。14 世紀年代記編纂者がそのままナティオの語を残している箇所について、ケーザイの真意を理解できずナティオを古い意味で理解したとする根拠は、14 世紀年代記編纂者でさえ理解できないほどケーザイの用例が新しかったとする前提以外には、実は示されていない。われわれはこの前提そのものを、無条件に認めるわけにはいかない<sup>18</sup>。

ではここで、ナティオの第 2 の範疇 16 例のうち、半数を占めるエクステラ・ナティオの検討に移ろう（注 15 参照）。

スューチの見解は次の通りである（Szűcs 1984: 479）。従来、ゲンスが王国内に住む者全体、つまり非ハンガリー人をも含みうるような使われ方をする言葉であったのに対し、ケーザイが言う「フン人=ハンガリー人のナティオ」はフン人=ハンガリー人のみを含み、国内に住む非ハンガリー人は含まれなかった。そのため、ケーザイはフン王国内に住む異民族を、フン人のナティオと対比させるのに、エクステラ・ナティオという語句を用いたのであり、これはケーザイ独自の用例である。

この説明が妥当であるかどうか、具体例として第 10 章の 3 箇所を見てみよう。いずれも 14 世紀年代記に対応部分がある箇所である。

- (a) アッティラは弟のブダを、ティサ川とドン川の間にいる様々なエクステラ・ナティオの支配者、仲裁者に立てた<sup>19</sup>。
- (b) （アッティラは）箱に金を貯めておくことを軽蔑し、気前良く愛想がよかったためエクステラ・ナティオに愛された<sup>20</sup>。
- (c) 彼（アッティラ）の遠征隊は、エクステラ・ナティオを除いて、100 万人の武装兵からなる<sup>21</sup>。

このうち 14 世紀年代記でナティオが省略されているのは(a)のみで、(b), (c)では省略されていない。スューチによれば、ケーザイのいうエクステラ・ナティオの意味は「フン帝国内に住む外国人」であるが、(a)のナティオは、このケーザイ独自の意味であり、それを 14 世紀年代記作者が理解できなかったから省いた、他方ケーザイ自身は常にナティオを独自の新しい意味で使用したけれども、(b)と(c)については、ナティオの古くからの意味でも解釈可能だから、14 世紀年代に残ったというのがスューチの説明である (Szűcs 1984: 479–480, 487–488)。確かにスーチュの言うように、(a)はフン帝国内に居住する異民族という意味であり、(b)と(c)はフン帝国外の異民族だと解釈することは可能ではある。しかし別の解釈も可能である。(b)と(c)も、アッティラの支配下にある異民族を指すと解釈することも可能であり、さらに 3 例とも単なる異民族と解釈することも可能であろう。(a)のみが、14 世紀年代記作者にとって理解できなかったとするスューチの説明は、ここでも、14 世紀年代記作者はケーザイの新しいナティオの意味を理解できたはずがない、ということを前提とする循環論法となっており、その前提自体の正しさは証明されていない。

他方、エクステラ・ナティオが、明らかにフン帝国外の異民族を意味するとしてしか解釈できない例も『ゲスタ』にある。第 94 章には「この世のほとんど全ての外の民族から **ex omni extera natione** (ハンガリー王国に人々が) 入ってきた<sup>22</sup>」という記述がある。

つまりエクステラ・ナティオには、確かにフン帝国内に住んでいた異民族を示すのに用いられた例が多いが、必ずしもそうとは言えない例もあり、スューチの循環論法から離れて、実例を見ていくと、エクステラ・ナティオにそれほど厳密な意味はなく、単に「異民族」の意味で使われることもあり、これはむしろナティオの古くからの用法を引き継ぐものである可能性が見えてくる。

さらに、エクステラ・ナティオにケーザイ独自の用例があったとしても、スューチの言うように、フン人のナティオないしハンガリー人のナティオと明確に区別、対置されたものではない。そのような対照的な用

例は『ゲスタ』に見当たらない。エクステラ・ナティオと対比的に使われている言葉を探してみると、それは単なるフン人<sup>23</sup>、あるいはアッティラのゲンスである<sup>24</sup>。そもそもフン人のナティオという語句は、『ゲスタ』には一度も出てこない。

以上より、ハンガリー人以外の異民族を指すのに用いられているナティオは、古くからのナティオの用法を受け継いでいるものと考えた方がよいであろう。

#### 4.-III. ゲンスの使用例と意味

では、ケーザイがハンガリー人全体を指すのにナティオを用いて、王国内の他民族と区別するようになったのにもない、それまでハンガリー王国内に居住するハンガリー人、非ハンガリー人全てを指すのに使用されたゲンスという語を、ケーザイは別の新しい意味で使用した、というゲンスに関するスューチの説明は適切であろうか。

もう一度、ゲンスに関するスューチの主張をまとめておこう。

中世のラテンキリスト教世界において、ゲンスは漠然と人々を意味する言葉であった。どのような人々がそこに含まれるのかは文脈によった。自分が属する集団を指すのにも用いた言葉であったため、たとえばハンガリー王国の史書や年代記などであれば、外来の人々をも含めてハンガリー王国内に住む全ての人々からなる集団を指すのにも使われ、あるいは出自を同じくするハンガリー人のみに使われることも可能であった。このような用法はラテンキリスト教世界全体に共通して見られたことであった。しかし上述のように、13世紀には、それまでむしろ異民族や異教徒などを指すのに用いられていたナティオという語の否定的ニュアンスが消え、特に自民族を表すのにゲンスに替わってナティオが用いられ始めた。このカトリック世界全体に見られた新しい流れをハンガリーにいち早く取り入れたのがケーザイであり、したがって『ゲスタ』にはナティオやゲンスの新しい用法が見られる、というのがスューチの主張である。つまりケーザイはハンガリー人を指すのにナティオを使い始め、それにともないゲンスは新しい意味を帯び、ハンガリー人を指すのには

使われなくなったというのである。ゲンスの新しい意味とは、兵士、軍勢、部隊といった意味である (Szűcs 1984: 482–485; Szűcs 1999: 65.)<sup>25</sup>。

しかし『ゲスタ』には、ハンガリー人を指すのにゲンスを用いている例がある。実は、ケーザイはハンガリー人全体を示すのに、ナティオよりむしろ、ゲンスの方を使用している。

ゲンスは計 38 回使用されている<sup>26</sup>。このうち 22 回は確かに兵士、軍勢、部隊という新しい意味で使われていると解釈できる<sup>27</sup>。兵士を意味するとされる 22 例を除いた、残りの 16 例について詳しく見ていこう<sup>28</sup>。

16 例のうち第 46 章の例は、スューチの検討対象に含まれていない。残りの 15 例のうち、スューチによるとケーザイ以前の年代記等の記述からそのままゲンスの語を取り込んだのが 10 例で、ここには異民族や、ハンガリー人を意味するもののほか、聖書からの引用や慣用句なども含まれる。残りの 5 例のうち 2 例は、ケーザイ自身が新たに書いた部分にあり (第 25、82 章)、3 例は、中立的な「群衆」という意味で使われていると説明されているが (Szűcs 1984, 484)、これらもケーザイ自身が書いたものと見てよい。

まずは、先行する年代記などからそのまま取り込まれたとされている 10 例を除き、残りの 5 例および第 46 章を見ていこう。まず、ケーザイ自身が書いた部分にあるとされる 2 例は、どちらも兵士や軍勢という新しい意味ではなく、「人々」という、以前からの意味であるということはスューチ自身も認めている<sup>29</sup>。

次に中立的な「群衆」の意味であるとされる 3 例を検討しよう。第 95 章ではハンガリー王国がとても広く人々がまばらだ (*regnum erat amplissimum et gentibus vacuatum*, *Gesta*: 178; *SRH*: 193.) という部分で使われており、王国内に住む人々一般を漠然と指している。また第 76 章の末尾に出てくるゲンスは、異教の人々一般を意味している (*gens ipsa sub paganism constituta*, *Gesta*: 160; *SRH*: 188.)。漠然と「人々」の意味で使われているこの 2 例も、以前からの用法に属す<sup>30</sup>。次は、第 5 章に出てくる例を見てみよう。

全てのフン人はこの二人の女から生まれたのである。そして彼らはその湿地に留まったが、しだいにきわめて強力なゲンスへと、増え始めたので、土地は彼らを住まわせ、養うには十分ではなくなった<sup>31</sup>。

ここではゲンスは明らかにフン人全体、自民族を指している。決して漠然とした人々を指すわけではない。フン人の人口が増え、手狭となったメオティスの湿地からスキティアの地へ移住することになったという状況を説明する部分であり、歴史上の重要な転換点である。フン=ハンガリー人のナティオの歴史を書こうとしていたはずのケーザイであれば、ここは自民族であるフン人に、ゲンスではなくナティオを使ってしかるべきところであろう。

ではスューチが言及していない第 46 章を見てみよう。この章では 11 世紀中頃のハンガリー王国において、国王ペーテルに重用されたドイツ人やイタリア人が王とともに、ハンガリー人に被害を与えたこと、王国の貴族たちは自分たちのゲンスが王と外国人から被った害を見て (Videntes igitur principes et nobiles regni mala **gentis** suae... *Gesta*: 108; *SRH*: 174)、そのような行動をやめるよう王に懇願したけれども聞き入れられなかったことなどが書かれている。外国人とハンガリー人とを対比的に描くなかで、ハンガリー人をゲンスで表している。ここでもナティオは使われていない。

以上、ゲンスの具体的な使用例を見ても、ケーザイが決して一貫して、ハンガリー人のナティオを意識して、それを歴史の主体として描こうとしていたわけではないことがわかる。

次に、スューチによると先行する年代記などの記述から取り込まれたとされる 10 例のうち、第 76 章に注目してみたい。この章は『ゲスタ』の第 1 付録の冒頭におかれている章である。上述のように、第 1 付録は、『ゲスタ』執筆時のハンガリー王国に多数見られた外国出身の貴族家系の起源・出自を述べている。第 76 章では上述の、異教の人々を指すのに用いられた例のほかに 2 回、計 3 回ゲンスが使われている。

第 76 章の最初の例は、大首長ゲーザ（初代国王イシュトヴァーン 1 世

の父)が、カトリックへの改宗を決めたものの、その手は血で汚れていたため、これほど大きなゲンスを改宗させるには相応しくなかった (*nec erat idoneus ad fidem convertere tantem gentem*) と述べられている部分に出てくる。第2例は、第1例のすぐあと、ゲーザは神の声にしたがい、ゲンス改宗の任務を息子イシュトヴァーンに委ねることにしたが、自分のゲンスの改宗に関して (*circa conversationem suae gentis*)、自分ができること、やっておくべきことは全てした、という部分にある (*Gesta*: 158, 160; *SRH*: 188.)。どちらもハンガリー人をナティオではなく、ゲンスで示している。

2例とも、ハンガリー人のカトリック改宗に関する記述の一部であるが、これも歴史の転換点であり、ケーザイがナティオの新しい肯定的な意味を知り、ハンガリー人のナティオの歴史を描こうとしたのであれば、ここでゲンスの代わりにナティオを用いてもよかったはずである。なお、これはカトリック諸国から大勢の騎士や貴族がハンガリー王国にやってくる直前の状況を描いている部分なので、ここに出てくるゲンスは外国人を含まない<sup>32</sup>。

確かにケーザイはゲンスという語を、軍勢、兵士といった新しい意味で多用した。他方、ゲンスは、以前から自民族を指すのに用いられていた語であるが、『ゲスタ』にはこの古くからの用法も見られる。ケーザイが先行する古い歴史記述を利用した部分では、ハンガリー人を指すゲンスの語が、そのまま残ったとも考えられるが、歴史上の重要なできごとに関連する部分で、ゲンスをナティオに変えずにそのまま残したということを見ると、ケーザイがナティオの新しい意味や用法に意識的であって、自民族を指すのにゲンスに変えてナティオを積極的に使ったとは認められない。特に第5章、第46章、あるいは第76章などを見ると、ケーザイが、自民族を指すのにゲンスの代わりに新しい用語ナティオを積極的に使うようになったとは言えない。

これ以外にも、ナティオを主体として描いた作品であれば、ナティオの語を使ってしかるべきだと思われる部分がある。たとえば国制に関わりうるような記述がある第7章でもナティオの語は使われていない

(*Gesta*: 24-30; *SRH*: 147-148.)。あるいは第2書の冒頭にある第24章では、第2書の課題がハンガリー人のパンノニア帰還を記述することにあると述べているがナティオの語は用いていないし(*Gesta*: 76; *SRH*: 164.)、その重要なできごとを実際に記述している第2書の諸章でもハンガリー人を指すのに使われていない。

4.-IV. 『ゲスタ』に書かれた歴史の主体は、ハンガリー人のナティオか。

4つ目の論点は、ハンガリー人のナティオが、『ゲスタ』の叙述において、歴史の主体として描かれているのかどうか、ナティオが歴史的な枠組みとなっているのかどうか、という点である。

ケーザイのナティオの用例の中には、伝統的な古くからの意味で使われている例がある。また第2章を除けば、作品全体を通して、ハンガリー人全体を指すのにナティオの語は使われていない。第2章以外では、ハンガリー人全体を指すのに使われたのはナティオではなく、むしろゲンスである。

なるほどゲスタは、ゲルマニアやヒスパニアといった特定の領域や、特定の国や王朝の歴史を描いた作品ではなく、フン人=ハンガリー人の歴史をその起源から説き起こして描いた作品であり(Kersken 1995: 729)、ケーザイが「われわれ」意識にもとづいて、フン人=ハンガリー人を歴史の主体として描いたということはできるであろう。しかしケーザイはこのような歴史主体としてのハンガリー人を、序文の第2章を除けば、ナティオとして捉えているわけではなく、したがって『ゲスタ』をハンガリー人のナティオの歴史を描こうとした歴史書とは見なせない。

したがって、序文に見られるように、ケーザイが当時のラテンキリスト教世界においてナティオという語を自民族に使用する新しい傾向を知っていたことは確かであるが、しかし、ハンガリー人のナティオの歴史をまとめようと意思表示しているにもかかわらず、実際には、ハンガリー人のナティオを、一貫して歴史の主体として位置づけていたとは言えない。そもそもハンガリー人全体をナティオで指し示す例は、第2章にしか出てこないということを、もう一度確認しておきたい。

ハンガリー人全体を歴史の主体としてナティオで表わすのかどうかということは、単なる言葉の問題ではない。というのも、ナティオという語には、ハンガリー王国において国制上の位置づけを与えられた、政治的な国民という意味があると、解釈されうるからである。具体的には、13 世紀末以降、ナティオは貴族、とりわけ中小貴族層のことを指すようになる<sup>33</sup>。彼らは、中世の身分制的な体制のなかで、国王と権力を分有する特権身分層であるが、13 世紀後半については、大貴族の専横に対抗し、王権と協力して王国の平和を図る集団であるという政治的構図の中に位置づけられる<sup>34</sup>。ケーザイは、そのような統治構造、秩序を実現しようとする政治的立場を代弁しており、『ゲスタ』における真のナティオは中小貴族である、とスューチは主張する (Szűcs 1993: 312–313; Szűcs 1984: 506–511.)。

しかし『ゲスタ』に出てくる 20 例のナティオには、そのような意味がないことは、上記の検討からも明らかである。13 世紀後半の政治的状況と、『ゲスタ』を結びつけて解釈すること自体は必要なことであるが、両者の関連において、ナティオを中心的概念として位置づけようとする点に問題があると考えられる。

## 5. おわりに

以上、第 4 章では I.～IV. の論点について、具体的なナティオの使用例に基づいて検討してきた。その結果をまとめよう。

I. 『ゲスタ』には確かにナティオを、全ハンガリー人を指すのに用いた用例がある。これはケーザイの新しい点である。ただしそれは第 2 章に限られ、『ゲスタ』全体を通して見られる用法ではない。

II. エクステラ・ナティオは、確かにフン王国内の異民族という意味で使われる用法が多いが、そうでない例もある。また決してフン人のナティオやハンガリー人のナティオと対比されて用いられている概念でもない。またエクステラ・ナティオと対比されるのは、フン人あるいはフン人のゲンスであり、ナティオではない。

III. ケーザイがゲンスに軍勢、兵士という新しい意味を持たせて多用



したことは確かであるが、他方で以前からの意味でもゲンスを使用して  
おり、ハンガリー人全体を指すのにもこの語を使っている。

以上から、ケーザイが自民族を指すのにゲンスをやめて新しいナティ  
オに変えたとするスューチの主張 (Szűcs 1984: 481–485; Szűcs 1999: 65.)  
は認められない。

IV. 『ゲスタ』において、フン人のナティオないしハンガリー人のナ  
ティオは、歴史の主体として位置づけられてはいない。古代の自由民共  
同体から発したフン人=ハンガリー人を、歴史の主体としていることは  
確かであるが、そのフン人=ハンガリー人をナティオとして描いてはい  
ないし、『ゲスタ』のナティオには、政治的国民としての中小貴族を表す  
という機能もない。

以上が本論のまとめであるが、では、なぜ『ゲスタ』がナティオの歴  
史を描いたものだという見方が広まったのであろうか。あるいはなぜナ  
ティオが『ゲスタ』の重要概念として位置づけられてきたのであろうか。  
その背景の一つは、『ゲスタ』が人民主権論を主張する歴史書だという認  
識が長らく一般化していたことにあるかもしれない。人民主権論説を展  
開したのは、1933 年のヴァーツィの論文であるが (Váczy 1933)、たとえ  
ば近年でも、『ハンガリー大百科事典』のケーザイの項目では、依然とし  
て『ゲスタ』は人民主権論を唱えたとされている<sup>35</sup>

スューチ自身は、13 世紀後半に人民主権論が書かれたとするのは、時  
期尚早の解釈であるとして、これを退けたが (Szűcs 1984: 457–458.)、そ  
の影響から完全に免れたわけではないように見える。その表れの一つは、  
スューチがナティオに二つの意味があるとしている点である。ナティオ  
にはハンガリー人全体が含まれるが、同時に、全ハンガリー人の代表と  
しての中小貴族という意味もあるとしている (Szűcs 1984: 506–511.)<sup>36</sup>。  
いわば「ナティオ主権論」のような主張になっている。

人民主権論説を主張するもの以外でも、『ゲスタ』には政治思想、とり  
わけ中小貴族を国制上の中心におくような政治思想が表明されている作  
品だと見なされることが多い<sup>37</sup>。『ゲスタ』からそのようなケーザイの政  
治意識や政治思想を読み取ることはできるのであろうか。この疑問に答

えるためには、ナティオよりむしろコムニタス *communitas*（共同体）という語や、国制に関わると見なしうる記述について分析する必要がある。稿をあらため検討しなければならないが<sup>38</sup>、ここで確認しておきたいことは、『ゲスタ』は政治思想の書ではないということである。ケーザイの執筆の目的は、フン人=ハンガリー人が自分たちの国を独自のやり方で統治してきたことと、そしてケーザイが仕えたラースロー4世による統治の正統性とを、主にローマ教皇庁に対して主張することにあつた（Veszprémy 1999: 157–158.）。

## 注

\* 本稿は、Hirokazu SUZUKI, “Natio” in the Gesta Hungarorum of Simon of Kéza, In: T. Mitoma & J. Szmodis (eds.) (2019) *Law, Rights and Social Values in Japan and Hungary*, Chûbunihon Kyôiku Bunkakai, 93–107.を大幅に改変したものである。主要な結論に変化はないが、構成や論点を整理しなおし、必要な加筆、修正、削除を施した。

- 1 こうした傾向を「ナショナルな歴史叙述」の始まり、成立とする見方もある。これについては以下を参照。Szűcs 1999: 51, 59–60; Szűcs 1984: 465–470; Kersken 1995: 824–827.
- 2 ノルウェー、デンマーク、ハンガリーに見られたこのような傾向を、Mortensen は歴史記述の第二ステージと呼んでいる（Mortensen 2006: 259–260）。その他、Garipzanov 2011: 3.も参照。
- 3 『アノニムスの年代記』の作者は「ベーラ王の書記」と自称しており、どのベーラ王かについては諸説あるが、ベーラ3世（位 1172–96）とする説が有力である。
- 4 この他に、国王イシュトヴァーン5世（位 1270–72）の治世にも歴史書が書かれた。著者は有力貴族家系出身のアーコシュだと考えられており、一般に、『アーコシュの年代記』あるいは『イシュトヴァーン5世期の年代記』などと呼ばれる（Mályusz 1971: 7–10.）。
- 5 スューチは一般に使われている付録という言葉は不適切であり、第1付録、第

- 2 付録をそれぞれ第 3、第 4 書とすべき主張している (Szűcs 1984: 474–475.)。
- 6 Szűcs 1984 はスューチの論集に掲載されているが、もともと *Századok* 107(1973), 569–643, 823–878 に掲載された論文を再録したものである。ただし 642–643 ページに掲載されていた表、および 829–878 ページの付録 Függelék. Kézai Simon követjárás a Nápoly-szicíliai királyságban (1269–1271)は論集では省かれている。Szűcs 1999 のほうは刊行史料 *Gesta* に収録された英語論文だが、もともと 1975 年発行の *Etudes Historiques Hongroises. vol.I. Akadémiai Kiadó, Budapest, 1975, 239–281.*に掲載された論文で、それを一部変更したものである（変更は著者であるスューチではなく、*Gesta* の编者による）。Szűcs 1984 とほぼ同内容であるが、Szűcs 1984 の英訳ではない。叙述の順序が異なり、重要な違いもある。
- 7 たとえば Kristó 2002:72; Gunszt 2000: 56; Varga 2010: 288–290.など。ただし近年、その他の論点について、たとえばトマス・アキナスからの影響が『ゲスタ』に見られるとするスューチら見解をモルナールが批判している (Molnár 2014.)。
- 8 スューチはこの区別を強調するためか、ケーザイがあたかも「純粋なフン人あるいはハンガリー人のナティオ」 *pura natio Hunorum sive Hungarorum* や「純粋なハンガリー人」という表現を使っているかのように議論を展開している部分があるが (Szűcs 1984: 476, 501.)、『ゲスタ』ではそのような語句は使われていない。スキティアの地を意味する「純粋なハンガリー」 *pura Hungaria* という表現は使われているが (第 6 章)、我々はこれを「純粋なハンガリー人」と慎重に区別しておきたい。
- 9 *natio Hungarorum* 「ハンガリー人のナティオ」という語句も、*natio Hungarica* 「ハンガリー・ナティオ」という語句も『ゲスタ』には出てこないが、本稿では以下で見る第 2 章の内容から、*natio Hungarorum* 「ハンガリー人のナティオ」の語句を用いる。
- 10 *Cum vestro cordi affectuose adjaceret Hungarorum gesta cognoscere, et id mihi veraciter constitisset, nationis eiusdem historias, ...in volumen unum redigere procuravi,...* (*Gesta*: 1999: 2–3; *SRH*: 142.) なお K 写本では *historias* だが、H 写本では *victorias*。ケーザイは少し後の部分で、ハンガリー人の勝利だけではなく、敗戦についても書くつもりであると述べているので *historias* の方を採りたい。

- 11 ...scripturus quoque ortum **praefatae nationis**, ubi et habitaverint, quot etiam regna occupaverint et quotiens immutaverint sua loca. (*Gesta*: 6–9; *SRH*: 142.)
- 12 ナティオが全ハンガリー人を示すとしているのは Kristó 2002: 72。あとで見るように、スューチはケーザイのナティオには二つの意味があり、一つは全ハンガリー人、もう一つは中小貴族であるという。
- 13 Fugit igitur Chaba ...rediens in Scitiam ad patris **nationem** ac cognatos. Qui dum Scitiam introisset, mox incepit suadere, quod penitus redirent in Pannoniam ultionem de Germanicis accepturi. (*Gesta*: 68–70; *SRH*: 162.)
- 14 『ゲスタ』では **cognatus** という語は、ここでもしか使われていないが、語源を同じくする **cognatio** という語は 3 回使われており、いずれも血縁という意味である (第 4、32、86 章)。
- 15 フン人=ハンガリー人以外の集団を指す 16 例は以下の通りである。**sicut mundi nationes alias** (第 2 章); **natione Longovardus** (第 8 章); **Alamannum natione** (同章); **Cognita itaque armorum et animi occidentis nationis** qualitate et quantitate (第 9 章); **super diversas exterarum nationes principem constituit ac rectorem** (第 10 章); **ab externa natione amabatur** (同章); **Nationes** ideoque regnorum diversorum (同章); **praeter exterarum nationes** (同章); **externa natio**, quae eum sequebatur (同章); **praeter exterarum nationes** (第 12 章); **orbis terrae nationi** (第 16 章); **adhaerebat, externa autem natio Aladario** (第 19 章); **qui timentes occidentis nationes** (第 21 章); **quasi missitalium exterarum nationis** (第 22 章); **per Assiros et alias nationes** (第 71 章); **ex omni externa natione** (第 94 章)。
- 16 スューチによれば、このような例は第 9、10 (2 例)、16、19、20 の各章に計 6 例あるという (Szűcs 1984: 486–488, 546–547 (n.196, 198).)。14 世紀に編纂された年代記は、その後のハンガリーの年代記や歴史書の基礎となったとされる。  
*Encyclopedia of the Medieval Chronicle*. vol.I, Leiden / Boston: Brill, 2010, 348.
- 17 スューチはこのような例は 7 あるという。第 8 (2 例)、10 (2 例)、12、21、22 章 (Szűcs 1984: 486, 545–546 (n.195).)。
- 18 一つの例として、**occidentis natio** (西方のナティオ) をとり上げてみよう。第 9 章と第 21 章でこの語句を使用している。第 9 章ではフン人が西方のナティオの (**occidentis nationis**) 兵力と精神力の強さと大きさがわかったのち再び出陣し

た、という記述の中にあるが、14 世紀年代記では「西方のナティオ」の代わりに「ローマ人たち」となっている (*aminositatem Romanorum et armorum paraturam*, *SRH*: 260)。他方、第 21 章ではクリムヒルドの戦いで敗れたフン人の生き残りが、西方の諸ナティオを恐れ (*timentes occidentis nationes*)、フン人であることを隠しセーケイ人と名のりチグラ原に留まった、という部分に出てくるが、14 世紀年代記でもそのまま使われている (*SRH*: 278–279)。第 9 章と第 21 章で違いは前者が単数形、後者が複数形という点のみである。スューチはこの違いに関しても、ケーザイの新しい意味を 14 世紀年代記編纂者が理解できなかったと言うのみである (Szűcs 1984: 486, 546 (n.195, 196).)。しかしたとえば、西方には複数のナティオが存在していたため、14 世紀年代記編纂者にとって、単数形の「西方のナティオ」は不自然であるため、「ローマ人」に置き換えたのかもしれない。その他、『ゲスタ』第 19 章のドイツ人の支配者ディートリヒに関する記述を、14 世紀年代記編纂者が誤解したとするスューチの説明も十分な説得力をもたない (Szűcs 1984: 487–489; Szűcs 1999: 65.)。14 世紀年代記の該当部分は、*SRH*, 276–277.。

- 19 Ethelam regem praeficiunt, ipseque Budam fratrem suum de flumine Tize usque Don super *diversas exterarum nationes* principem constituit ac rectorem. (*Gesta*: 38; *SRH*: 150.) 14 世紀年代記には、*Atylam... regem perfecerunt,... et ipse Budam fratrem suum de flumine Tysce usque Don principem constituit ac rectorem...* とあり、*exterarum nationes* は省かれている (*SRH*; 261.)。
- 20 In archa sua aes tenere contemnebat, propter quod ab **extera natione** amabatur, eo quod *liberalis* esset ac communis. (*Gesta*: 40; *SRH*: 151.)
- 21 Expeditio autem eius praeter **exterarum nationes** decies centenis armatorum millibus replebatur,... (*Gesta*: 42; *SRH*: 151.)
- 22 Intraverunt ... fere ex omni **extera natione**, quae sub caelo est... (*Gesta*: 174; *SRH*: 192.)
- 23 第 10 章「(アッティラ王は) エクステラ・ナティオから愛され、彼のフン人からは恐れられた。... ab **extera natione** amabatur,... a **suis Hunnis** mirabiliter timebatur.
- 24 第 10 章「彼 (アッティラ) のゲンス [すなわちフン人—筆者] は天幕と馬車を

使って野を進行し、彼に従うエクステラ・ナティオは町や村に住んだ。フン人の衣服の流儀と形は、彼と彼のゲンスにとって、メディア人の流儀を保持していた。」 **gente enim sua** in campis cum tabernaculis et bigis incedebat, **extera natio**, quae eum sequebatur, in civitatibus et in villis. Indumentorum vero modus et forma sibi et **genti** modum Medorum continebat. (*Gesta*: 42–44; *SRH*: 152.)

25 ゲンスが兵士、軍勢という新しい意味で使われていることを最初に指摘したのはホルヴァートである。Horváth 1954 : 357–358.

26 スューチは計 37 回としているが、挙げている例は 36 例。しかし実際には 38 回使われている。このうちスューチが言及しない第 46 章は、スューチ説に反する例であるが、これについては後述する。

27 スューチの指摘通り 22 例あるが、スューチが上げているのは 21 例で、第 11 章の最後の例に言及していない。ut copia suae **gentis**, quae absens fuerat, iungeretur.

28 残りの 16 例は以下の通り。in **gentem** validissimum succrescere inceperunt (第 5 章) ; **Gentes** in eo regno procicatae (第 6 章) ; **gens** iacet Crorsmina (同章) ; invitis **gentibus** praefatis (第 8 章) ; de **gente** Corosmina (第 22 章) ; a **gentibus** occidentis (第 25 章) ; multarum **gentium** nationes (聖書からの引用。第 44 章) ; **gentem** tam novella in fide catholica (同章) ; mala **gentis** suae (第 46 章) ; ad fidem convertere tantam **gentem** (第 76 章) ; conversationem suae **gentis** (同章) ; **gens** ipsa sub paganism constituta (同章) ; ex **gente** Svevorum (第 82 章) ; more **gentium** (第 95 章) ; **gentibus** vacuatum (同章) ; ex **gente** Christiana (第 99 章) .

29 第 25 章と第 82 章 (Szűcs 1984: 484)

30 なお、スューチは中立的な用法として、第 76 章に出てくるこの例ではなく、別の例（あとで見る第 76 章の第 1 例）を挙げているが、それは後で見るように「中立的」ではなく、ハンガリー人を指し示すものである。同章のなかで「中立的」と言えそうなのは、こちらの異教の人々を指す第 3 例のほうである。これはスューチの単純な誤りの可能性が高い。下記注 32 参照。

31 Ex quibus mulieribus omnes Hunni originem assumpsere. Factum est autem, cum diutius in ipsis paludibus permansissent, in **gentem** validissimam succrescere inceperunt, nec capere eos potuit ipsa regio et nutrire. (*Gesta*: 16; *SRH*: 145.)

32 スューチは第 76 章の第 1 例を中立的な例としているが、これは上述の同章

末尾に出てくる第 3 例の誤りであろう。また第 76 章の第 2 例と第 3 例を先行する史書等からの引用としているが、第 2 例は第 1 例とともに、ケーザイ自身の記述である (SRH: 188.)。上記注 27 参照。

33 Varga 2010: 286–291.などを参照のこと。

34 たとえば鈴木 1998a、鈴木 1998b などを見よ。

35 *Magyar Nagylexikon* 10.: 860–861. その他 Kristó 1972: 11–13, 21–22; Deér 1934: 108 など。人民主権論説が広まったことについては、Molnár 2014: 428–430.を参照のこと。

36 この主張は Szűcs 1999.にはない。なお、この問題に関して、指導者の選出と罷免に関する記述から、『ゲスタ』では権力移譲論が主張されているとするスューチの解釈についても (Szűcs 1984: 456–464.)、再検討が必要と思われる。

37 Varga 2010: 288–291; Szűcs 1984: 506–511; Deér 1934: 110–111.など。

38 Gerics 1957.など参照。なお、先行研究で説明されているような、大貴族や外国出身者に対する中小貴族の反感が表明されているといった『ゲスタ』についての評価が妥当かどうかも検討を要すると考えられる。

## 参考文献

### 一次史料

*Gesta* : Simonis de Kéza 1999: *Gesta Hungarorum*. CEU Press, Budapest / New York.

SRH : Szentpétery, Emericus ed. 1937: *Scriptores Rerum Hungaricarum tempore ducum regumque atirpis Arpadianae Gestarum*. vol.I., Budapest, 1937. (rep. Nap Kiadó, Budapest, 1999).

### 研究文献

Deér, József (1934) *Közösségérzés és nemzettudat a XI.–XIII. századi Magyarországon*. Klebelsberg Kuno Magyar Történetkutató Intézet Évkönyve 4, 93–111.

*Encyclopedia of the Medieval Chronicle*. vol.I, (2010) (Graeme Dunphy ed.) Leiden / Boston: Brill.

Garipzanov, Ildar H. (2011) *History Writing and Christian Identity on a European*

- Periphery. In Ildar H. Garipzanov ed. *Historical Narratives and Christian Identity on a European Periphery. Early History Writing in Northern, East-Central, and Eastern Europe (c. 1070-1200)*. Turnhout, Brepols, 1–11.
- Gerics, József (1957) Adalékok a Kézai krónika problémáinak megoldásához. *Annales Universitatis Scientiarum Budapestinesis de Rolando Eötvös nominatae. Sectio Historica* 1, 106–134.
- Gunszt, Péter (2000) *A magyar történetírás története*. Debrecen: Csokonai Kiadó.
- Horváth, János (1954) *Árpád-kori latinnyelvű irodalmunk stílusproblémái*. Budapest.
- Horváth, János (1963) A hun-történet és szerzője. *Irodalomtörténeti közlemények*, 446–476.
- Kersken, Norbert (1995) *Geschichtsschreibung im Europa der „nationes“ : Nationalgeschichtliche Gesamtdarstellungen im Mittelalter*. Köln / Weimar/ Wien: Böhlau Verla.
- Kristó, Gyula (1972) Kézai Simon és a XIII. Század végi köznemesi ideológia néhány vonása. *Irodalomtörténeti Közlemények* 76, 1–22.
- Kristó, Gyula (2002) *Magyar historiográfia I. Történetírás a középkori Magyarországon*. Budapest: Akadémiai Kiadó.
- Mályusz, Elemér (1971) *Az V. István-kori Gesta*. Budapest: Akadémiai Kiadó.
- Molnár, Péter (2014) Olvasta-e Kézai Simon mester Aquinói Szent Tamást? *Századok*, 2014, 427–441.
- Mortensen, Jars Boje (2006) Sanctified Beginnings and Mythopoeitic Moments. The First Wave of Writing on the Past in Norway, Denmark, and Hungary. c.1000–1230. In Lars Boje Mortensen ed., *The Making of Christian Myths in the Periphery of Latin Christendom (c. 1000–1300)*. Copenhagen: Museum Tusculanum Press, 247–273.
- Szűcs, Jenő (1984) Társadalomelmélet, politikai teória és történetiszemlélet Kézai Gesta Hungarorumában. In *Nemzet és történelem*. Budapest, 413–555.
- Szűcs, Jenő (1993) *Az utolsó Árpádok*. Budapest: História / MTA Történettudományi Intézete.
- Szűcs, Jenő (1999) Theoretical Elements in Master Simon of Kéza's Gesta Hugarorum. In Simonis de Kéza, *Gesta Hungarorum. The Deeds of the Hungarians*. CEU Press,



Budapest / New York, XXIX–CIV.

Váczy, Péter (1933) A népfelség elvének magyar hirdetője a XIII. Században: Kézai Simon mester. In: *Emlékkönyv Károlyi Árpád születése nyolcvanadik fordulójának ünnepére*. Budapest, 546–563.

Varga, Benedek (2010) Political Humanism and the corporate theory of state: nation, patria and virtue. In: B. Trencsényi, M. Zászkaliczky (eds.) *Hungarian political thought of the sixteenth century*. Leiden – Boston: Brill, 285–313.

Veszprémy, László (1999) utószó, 159-160. In *Anonymus, A magyarok cselekedetei: Kézai Simon, A magyarok cselekedetei*, Osiris, Budapest.

鈴木広和 (1998a) 「ハンガリー王国の再編」、『岩波講座世界歴史 8 ヨーロッパの成長』(岩波書店) 79–99。

鈴木広和 訳・解題 (1998b) 「ハンガリー王国『1267 年法令』試訳」、『ロシア・東欧研究』第 2 号、221–229。

ニーデルハウゼン(渡邊昭子ほか訳)『総覧ロシア東欧史学史』北海道大学出版会、2013 年。